論文の内容の要旨

論文題目　　中世禅宗の儒学学習と科学知識

氏　　名　　川本　慎自

本論文の目的は、日本中世の社会と禅宗との関係をめぐる二つの見方、すなわち「思想・精神面で影響を与えた」点（「清冽な禅宗」イメージ）と「政治・経済に影響を与えた」という点（「経済の禅宗」イメージ）を整合的に理解することにある。これら二つの見方は、異なる時期や場面を切り取ったものではあるが、まぎれもなく同じ日本中世の禅宗の姿をどちらも正しく示している。しかし、そこから見えてくるものは大きくかけ離れており、論理的には相反する側面さえも持っている。近年、室町幕府の宗教政策研究や室町期の禅宗美術・五山文化研究は大きな進展を見せているが、幕府政治史の側からの禅宗への言及と、美術史・文化史の側からの禅宗への言及は必ずしも連関せず、個別に検討が加えられることが多い。そこで、学問史・技術史という視角を用いることによって、美術制作や政治経済活動を支える知識・技術の源泉を明らかにし、これらを架橋しようとするものである。

そのために、本論文では、禅宗寺院のなかで教学面を担当する西班衆禅僧のみならず、経営面を担当する東班衆禅僧のもっていた知識・技術に着目し、それが禅宗寺院における学問（とくに儒学学習とそれに付随するもの）と密接に関わっていたことを明らかにする。これによって、中世社会において禅宗寺院の果たした役割の全体を明らかにするとともに、近世につながる科学意識の萌芽についても見通すものである。

具体的な構成は以下のとおりである。

序章「中世の禅宗と儒学をめぐる研究状況」では、禅宗史研究の研究状況を概観した上で、禅宗寺院および禅文化をめぐる思想文化面と政治経済面の二つの対照的な研究動向、すなわち「思想・学問の面で高い精神性を持ち文化に影響を与えた宗教」という見方と「鎌倉・室町幕府と結びつき政治・経済の面で社会を動かした宗教」という見方が互いに連環のないまま蓄積されていることを指摘して、その二つを架橋する一つの方法として学問史的手法の有効性を挙げる。そしてとくに禅宗寺院における儒学学習に着目

し、その研究状況を具体的に概観する。

第一部「禅僧の経済活動と知識形成」は、東班衆について、とくに日本中世における実態と推移を検討する。中国禅から受容した「生活即修行」という思想を反映して、学問を担当する西班衆と経営を担当する東班衆は対等と位置付けられているが、日本中世においては西班衆と東班衆の僧は固定化しておらず、互いに転位することがしばしばあることを明らかにする。そして室町期に至って、東班衆の間で継承される塔頭が出現して「東班衆の法系」として固定化していく。このことは、荘園経営をはじめとする経済活動に用いられる知識（年貢徴収の方法や守護との関係構築など）が師資の間で受け継がれ、特化して高度化していくことにつながるが、一方で東班衆と西班衆が対等であるという経緯から、禅宗寺院において行われた儒学系の学問の場にも東班衆は関与することが可能となる。禅宗寺院内の講義の口述記録である「抄物」の記述の検討から、こうした寺院内の講義では、いわゆる儒学の講義にとどまることなく、荘園経営の実際の現場における知識が伝授されていることを明らかにし、儒学講義の場において経済知識が培われていると結論づける。

第二部「禅僧の儒学と足利学校」では、これらの儒学学習の場がどのように成立し、どのような実態を持っていたかという点について、足利学校を中心とする東国を例として取り上げて考察する。学問所としての足利学校が実質的に成立するのは応永年間の関東管領上杉憲実による整備以降であるとされるが、それ以前の南北朝期の関東禅林においても、とくに常陸正宗寺を中心とする儒学学習が盛んに行われており、書籍の移動状況などを考察することにより、常陸正宗寺・鎌倉建長寺・伊豆修禅寺を結ぶ儒学の人的・物的交流が足利学校成立以前から形成され、それが足利学校における儒学学習につながってくることを考察する。また足利学校における儒学学習の具体的な例として、戦国期の『論語』講義のなかに鎌倉公方・古河公方の故実にかかわる知識が散見していることに注目し、猪苗代兼載ら連歌師と足利学校との間の関係を指摘して知識が形成される様相を明らかにする。

第三部「儒学に付随する科学知識」では、再び視点を京都に戻し、五山禅林における儒学や漢学学習のなかに、寺院経営・経済活動や政権との関わりに資するような知識が含まれることを具体的に考察する。事例としては、室町期の禅僧江西龍派による杜甫詩講義には赤米や湿田耕作などの農業に関わる知識が含まれ、戦国期の禅僧月舟寿桂による『三体詩』講義には東国の農事歌に関する知識、同じく戦国期の禅僧桃源瑞仙の『周

易』講義には室町幕府の「国役」（守護出銭）の金額算定に関する知識が含まれていることなどを取り上げる。これらの背景には禅僧の周辺に公家・武家など様々な階層との人脈が形成されているということがあり、儒学（広義の漢学も含む）講義を互いに聴講することを通じて知識が形成され、さらにはこれらの聴衆の関心が講義内容にも影響することによって、講義自体に具体的な実用的知識を含むようになってゆくことを明らかにする。さらに、桃源瑞仙の『周易』講義には算木を用いた計算技術の知識が含まれており、それが禅宗寺院の金融経営や土倉角倉家の経営とも関わっていくことを明らかにし、またなぜ禅僧がそうした計算技術を持つことができたかという思想的背景についても、東班衆の動向と関連させて考察する。

終章「室町の文化から江戸の科学へ」では、これら三部にわたって考察してきた内容を総括し、禅宗寺院において蓄積された実用的知識が、江戸初期の科学技術の基礎となってゆく様相を展望する。とくに禅宗寺院内における東班衆の位置づけの高さが中国禅の思想に起因することと、それが禅宗寺院における実用的知識の尊重につながったことを指摘し、そうした思想と知識が公家や戦国大名に広がることで、たとえば直江兼続や徳川家康らの学問（とくに医学知識）につながることを明らかにする。これらの検討により、冒頭に掲げた中世禅宗の思想的な側面と経済的な側面の齟齬については、中国禅から日本禅宗が継受した思想である「生活即修行」という概念のもとに整合的に理解できることを位置付ける。

以上のように、本論文は、中世禅宗について、学問史的手法をもちいて、とくに儒学学習とそれに付随する科学知識を検討することによって、中世社会におけるその位置付けを明らかにしたものである。